

卷 頭 言

— 不 況 に 直 面 し て —

志 村 清 次 郎*



近頃来る人、会う人の口から必ずと云つてよいほど産業界の不況をかこつ言葉が出る。私も亦必ずそれに合槌をうつている。最早やそれは日常の慣習的挨拶語とさえ感ぜられるに至つたようである。

しかしよく考えてみると、終戦後既に 10 年、古い言葉で一と昔という長い歳月を、果して我々は敗戦国民らしい耐乏の生活、勤儉な日常に終始したかどうか。我々が当初覚悟した冷酷厳肅な敗戦国民としてのみじめさは、僥倖と云おうか不思議と云おうか、世界情勢のめまぐるしい変転、わけでも鉄鋼業界は朝鮮動乱の勃発の影響などで、不安定の中にも敗戦国としては異例の境涯に置かれていた。従つて今日デフレ政策が強行せられ極度に深刻化しつゝある産業経済界の様相を目の前にして、初めて予想せられた厳肅なる試煉期に逢著したものと痛切に考えざるを得ないのである。

我々の携わる鉄鋼産業界は、可成り以前から世界的生産過剰が喧伝せられ、消費的大変動が継続せられざる限り早晚かゝる状況に追込まれることは予想せられていたし、これに対処する方策も亦種々考究せられ、実践せられて来た。しかし設備の合理化並に拡大が各方面に行われ、それにつれ競争の激化は日一日と熾烈となり、且つ競争が国際性濃化の度を増加するに随つて、高価なる主原料の大部分を輸入によつて賄わざるを得ないと云う悪条件下の我国に於ては、本事業の成立は特に品質の改良、歩留の向上、生産原価の切下げが問題の核心となるので、直接生産に従事する技術者の責任は彌が上にも増大するのは当然である。国力を高め生きるための唯一の道である技術の向上による優良品の低原価生産に集中せられて来ることは、一面又頭の使いどころ、腕の揮い時として千載一遇の好期でもあり、技術者の本懐とするところであると云うべきではなからうか。

しかし鋼の製造は製品に種々の欠陥が伴い勝ちで、完全無欠のものを得ることは至難とせられている。元来鋼は無生物であつて物を言わぬ。しかし固有の化学的、物理的法則に従つて溶解し且つ凝固するものであり、鋼塊に於ける気泡、パイプ、非金属介在物、偏析、加工材に於ける各種の欠陥はいずれ

* 三菱鋼材株式会社常務取締役。工博。

も生ずべき素因があつて発し、製造条件に従つて生じ、決して偶然ではない。而してその生産方式、条件を決定し実施する人即ち技術者の意図するところ、精神の打込方、努力の払い方等が鏡の如く製品に反映するものであつて、若し合理的条件の下に合理的作業を行い猶且つ品質が良好でないとするならば、その合理的条件及作業は不適當又は一つの錯覚に過ぎないものであり、その技術は未熟であり、その努力は不充分であるという誹りを免れ得ないであらう。勿論有らゆる欠陥を完全に且つ常に排除することは到底不可能なことであるが、能う限りの研鑽努力によつて漸減せしめることは当然技術者の責務であり、今日最も喫緊の要務であると思う。その為には若い人々に根元の究明と云うことを強調している。常に細心の注意を以て欠陥の排除に努めるかたわら、欠陥の因つて来る根元を徹底的に糺し、瑣末な問題でも糊塗的手段を弄せず、充分なる対策に力を致すべきである。日常当然行うべくして不注意の為等閑に附せられているため大変な失策を繰返えしていることが往々にしてあるものである。極めて当り前のことであり、取立てゝ力説するほどのことでなくとも、この当り前なことをなほざりにすると云う中に含まれているおざなりな仕事の排斥、真剣な努力の結集は兎角忘れられ勝ちである。物を言わぬ無生物の鋼も、真剣なる根元の究明実践という当然のことの中から質も高まり、歩留も良くなり、原価も低下し、我国鉄鋼業界の生くべき道が拓かれるであらうと私はかく考えるものである。(29.7.12)